

小森陽一・富山太佳夫・沼野充義・兵藤裕己・松浦寿輝編
 『岩波講座 文学』全13巻・別巻1より
 岩波書店, 2002-2004年

安達大輔

文学研究の「現在性」を強く意識したテーマによって各巻を構成した『岩波講座 文学』から、ロシア文学関連の論文を選んだ。シリーズの性質上、執筆者の従来の研究を凝縮し、ロシア文学研究の専門家以外にも読みやすくまとめた論文が揃い、高水準でありながらそれぞれのテーマへの格好のイントロダクションとなっている。後述する理由により、個別に順次紹介するといういささか愚直なスタイルをとりつつ、10本の論文を書評させていただく。

亀山郁夫「自足する猿の小さな悪意——スターリン時代の検閲文化とその一断面」
 (2巻/『メディアの力学』)

はじめにスターリン期における検閲の政治的諸制度を概観したあと、文学テキストの検閲の実態に光を当てる。その過程にいわゆる『ジダーノフ旋風』におけるゾーシチェンコ批判と、ソ連作家同盟からの追放が位置づけられる。当初は児童向けに書かれたはずの彼の『猿の冒険』がなぜ危険視されたか。その理由を、テキストの異同や関係者の証言を調査し、文学的記憶を解きほぐすことで探っていく。批判された作家たちが弁明の手紙を直接スターリンに宛てているように、権力としてのスターリンというアイコンはテキストを一貫して、とても可視的になっている。可視的なものを成立させている透明なものを見えるようにするという意味でも、論文の前半部分で検閲制度が最近の資料によって概説されているのは、この問題への貴重なガイドとなる。

番場俊「小説の身体——19世紀ロシア小説における〈作者〉と〈主人公〉」(3巻/『物語から小説へ』)

バフチンの〈作者〉と〈主人公〉という問題構成は、19世紀ロシア小説が変容することで可能になったとする。可視的な身体を持つ「イメージ」としての作者から、作者がテキストの枠へと移動し不可視になると同時に、私的な内面を有する〈主人公〉が誕生し、身体からいったん切断されるかたちで〈声〉が想像される。作者性はその限界としてのテキスト、『悪霊』において絶えず掘り崩される。〈声〉たちは作者を求めては失敗し、意

味作用を失った文字が残される。バフチンを利用して 19 世紀ロシア小説における文字と身体の関係を探りつつ、返す刀でバフチンの分析装置（〈作者〉〈声〉）そのものを歴史化する作業は、自己言及のループを見出そうとする問題意識において、言説分析の最良の部分と共有している。作者の身体系譜図を固定的な図式にしないためにも、他の研究者による応答が待たれる。

楯岡求美「メイエルホリドの演劇性——チェーホフ、コメディア・デラルテとの出会い」(5 巻/『演劇とパフォーマンス』)

脱中心化された世界モデルを描き出すメイエルホリド演劇は、チェーホフによって触発され、スタニスラフスキーの心理主義から離脱する。その主題が、ブローク『見世物小屋』の上演を経由しコメディア・デラルテを再発見することで展開し、ピオメハニカやモンタージュへ結実する、という系譜をたどる。その過程で虚構性、身体性、仮面、即興性、脱言葉といったキーワードの内的連関が明らかにされ、通底するメイエルホリドの演劇観がとてどもクリアに示されている。演出家による役者の身体統制という、いわば絶対的な関係によって、脱中心的な関係を表現することが企図されているのであれば、そのパラドックスの行方が気になってくる。

沼野充義「ロシア・ユートピアニズムの詩学」(8 巻/『超越性の文学』)

メタファーとメトニミーという修辞学の二分法を、ユートピア的想像力の二つの類型として捉えなおし、ロシア・ユートピア文学の系譜を整理してゆく。文学史の記述でメタファー/メトニミーによる類型化を行うことには先例があるが、ユートピア文学に応用されたことはなかったという。それはもしかしたら、メタファー/メトニミーによる比喩表現とは、常にすでにユートピア的なものだったからではないか？そんなことまで夢想させる、射程の広い論文である。二つの想像力の差異は質的なものだが、量という観点から見直すことは可能だろうか。メタファー的想像力が断絶・飛躍という契機を含むならば、飛躍の幅が狭まると、隣接・更新というメトニミー的なそれに近くなることはあるだろうか、またその逆はどうだろう。こうして微分化の誘惑に駆られるほど、指し示されているユートピア的想像力の圏域は広大で豊かである。

安岡治子「ドストエフスキーのキリスト教——『カラマーゾフの兄弟』を中心に」(同巻)

『カラマーゾフの兄弟』における中心的な理念を、「各個人の自由と人格が完全に保たれながら全体としては統一がとれているという理想状態」としての教会に見出す。東方キリ

スト教というテキストの森に迷い込むには、好奇心とともに不安も感じる。本論では、教会スラヴ語訳を含む旧・新訳両聖書、東方キリスト教のテキストや伝統と、シェリング、ソロヴィヨフ、フョードロフらの思想が重ね合わされることで、さきの理念は明確な像を結んでいる。『カラマーゾフの兄弟』をはじめとするドストエフスキイのテキストにおいて、ここで見出された理念、ひいては理念一般は、最終的な審級に置かれているのか、それとも多声化されさまざまに文脈化されているのだろうか。

藤沼貴「ロシア文学における歴史小説——その前史とカラムジン、プーシキン、トルストイ」(9巻/『フィクションか歴史か』)

カラムジン、プーシキン、トルストイの歴史小説を、「現在の基準としての過去」を描いたテキストとしてとりあげる。それは、歴史の読み方を小説的に読者へ差し出すことで、事実と虚構、過去と現在のはざまに「真実」を共有する共同体を構築しようとする試みにほかならない。「真実」の小説的構築の諸相、同時代の歴史記述とのあいだにそれが持つ関係など、「表象の政治学」へとつながる興味深い問題を多く含む論文である。前半部分で扱われている近代以前の歴史記述・歴史物語に「ロシア人の歴史意識」という枠組みを当てはめるならば、一定の留保が必要かもしれない。「ロシア」という全体性を想定し、それを通時的な連続性において把握しようとする発想そのものが、すぐれて近代的なものである可能性はある。

望月哲男「社会主義リアリズム論の現在」(10巻/『政治への挑戦』)

ソ連崩壊後に忽然活発になった社会主義リアリズム研究の多様な枠組みを、丁寧かつ明快に整理する。同時に、そうした方法論自体を言説として捉え、そこにポストソビエト時代の文化を生きる研究者たちの利害関心を見るという、二重の視線によって分析を行っている。問題のアクチュアリティとは、対象との時間的な距離の近さではなく、対象を分析することで分析者の現在自体が問われうる、そのような循環が生み出されることにある、という静かな声が聞こえてくる。ここから引かれる二本の線に沿えば、紹介されている膨大な文献を精読することとともに、日本の研究への言及がないことも考慮しつつ、研究者集団として名指されている「われわれ」のあいだの差異を切り出してゆくことも必要だろう。

草野慶子「19-20世紀転換期のロシア・レズビアン文学」(11巻/『身体と性』)

19-20世紀転換期のロシアにおいて、レズビアン文学という形式を選択することで声を獲得しようとした女性たちの試みは、彼女たちの性が「両性具有」の像へと転位され霊と

肉の止揚の隠喩となることで、性を観念化する伝統的なロシア的心性へと回収される危険に曝されていた、と論じる。同性愛を両性具有として実践することで、女性たちが「女を愛する男」を演じる女という形象を書き/演じたのだとすれば、それは男性・女性という二つの本質の獲得というより、性差を本質化する規範をパロディする脱構築的な契機なのではないだろうか。異性愛へ置き換えることでしか同性愛を表象しえぬ支配的な表象のシステムを問いに付している点で、本論は彼女たちと共闘する可能性を持っている。

貝澤哉「襞，そして律動する言葉——アンドレイ・ベールイ『ペテルブルク』を読む」(12巻/『モダンとポストモダン』)

ベールイ『ペテルブルク』のなかに、「襞」という、物語のドミナントとなるイメージの連鎖を見出しつつ、それをイメージのレベルからテキストを織り込む反復運動へと読み換える。頻出する「襞=皺=爆弾・爆発」といった形象、さらには、それらによって構成される物語を精神分析的に解釈することで浮かび上がる「父」「母」「子」といった祖型的なイメージすらが、言語の「襞」化された運動によって織られているテキスト、それが『ペテルブルク』だという指摘は鋭い。いっぽうで、「襞」の野放図な運動を中心化し、一定の領土に固定しようとする運動もテキストに作用していることが示唆されている。それが言説ということになるだろうが、「襞」と諸言説との具体的なせめぎ合いの諸相をも見てみたくなる。

桑野隆「ロシア・フォルマリズムとバフチン」(別巻/『文学理論』)

ジャンルとパロディの問題をめぐって、フォルマリストのよき<対話>者としてのバフチンを浮かび上がらせる。分析を一貫するのは、バフチンのテキストを、特定のたとえば宗教哲学の言説に還元することなく「社会的交通」へ解き放とうとする姿勢であり、そうすることでバフチンを遂行的に反復しようとする選択である。トゥイニャーノフ的な文学史記述は、いわば「見えるものしか見えない」というトートロジーによって、文学史を記述/観察する者の(不在の)位置をかえって潔く照射してしまう。ではバフチンが、文学テキストは多様で具体的な「社会的交通」の場であり、「内在的に社会学的」であると言ふとき、「社会的交通」の出来事性はその記述においてどのように引き受けられているのだろうか。

読み終えてみて、ロシア文学関連と梓づけてはみたものの、各々の論文を俯瞰できるような全体的な視座をほとんど持てなかったことに気づく。テーマの重複を避ける編集の配慮ももちろん関係している。しかしより重要なものとして露呈しているのは、方法的に

鋭敏に文化研究に取り組めばそれだけ、国民文化というものが、断片を継ぎはぎされた不均質なテキストだということが明らかになる、という事態かもしれない。ナショナルな枠組みで総括することは困難になり、共通の議論の場の欠如が露わになってゆくだろうが、事態は一概に嘆くべきものでもない。内部・外部の他者とされていたものへと接続する可能性は増すからだ。明示的に扱われなかったテーマ、国民文学という枠づけの政治学と、マイナー文学への語りかけ（ジェンダーの観点からは分析があるが）、実はそれらこそ来るべきものとして10本の論文が指し示している、と読むこともできる。単一の言語しか話されない場でも、複数の言語がすれ違うだけの場でもなく、メジャーとマイナー、ミクロとマクロ、内部と外部を接合しうる対話のポイントのネットワークとして、新しいロシア文学研究は、不可能なものから、困難ではあるが可能なものへと変わってゆくのもかもしれない。